

特発性血小板減少性紫斑病に対する Helicobacter pylori 除菌療法の有用性の検討

たか はし つとむ ま にわ やす ひさ つ むら ひろ と
高 橋 勉^{1,2)} 馬 庭 泰 久²⁾ 津 村 弘 人³⁾
いし くら ひろ と やま ぐち しゅう へい
石 倉 浩 人³⁾ 山 口 修 平¹⁾

キーワード：特発性血小板減少性紫斑病 (ITP), Helicobacter pylori, 除菌療法

要 旨

近年、特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) に対する Helicobacter pylori 除菌療法の有用性が多数報告されている。2002年4月から2005年3月まで益田赤十字病院内科に受診した慢性 ITP 患者12例の HP 感染の有無、除菌療法の効果について検討したので報告する。12例中11例が HP 陽性で全例3剤併用療法 (LPZ+AMPC+CAM) にて除菌療法を施行した。除菌療法による血小板増加効果評価可能9例中8例で除菌が成功し、8例中7例で除菌後に有意な血小板増加効果を認め、全奏効率87.5%と良好な治療効果を認めた。これらの症例はステロイド療法や脾摘などの既治療抵抗例であった。長期間の観察 (平均観察期間34.7ヶ月) によっても全例が寛解状態を維持しており、HP 除菌療法によって一部の患者は治癒が得られることが期待される。

はじめに

特発性血小板減少性紫斑病 (以下 ITP) は薬剤等の原因や基礎疾患が明らかでないにもかかわらず、血小板の破壊が亢進し、血小板減少をきたす後天性疾患である。主体となる血小板破壊の機序は血小板に対する自己抗体を介した免疫反応によることから、自己免疫疾患として把握されてい

る¹⁾。Helicobacter pylori (以下 HP) は、消化性潰瘍、慢性萎縮性胃炎、胃癌、胃 MALT リンパ腫の病因としての関連が確認されている。HP は胃粘膜局所に強い免疫反応を惹起し、種々の炎症性サイトカインや抗胃粘膜細胞自己抗体の産生を介して胃粘膜障害を引き起こすものと考えられているが、一方で HP が慢性蕁麻疹や冠動脈疾患などの消化器疾患以外の疾患との関連も報告されている²⁾。近年 ITP に対する除菌療法の有用性を示す報告が内外から相次いでおり、益田赤十字病院内科において診療した ITP 患者に対して HP 除菌療法を行い、良好な結果を得たので報告する。

Tsutomu TAKAHASHI et al.

1) 島根大学医学部内科学第3 2) 益田赤十字病院内科

3) 島根大学医学部附属病院腫瘍科

連絡先：〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1